巻　頭　言

# 大きく変わる 植調 第49巻に寄せて

公益財団法人日本植物調節剤研究協会理事長
小川　奎

「植調」創刊号は，植調協会発足から約２年半後，高度経済成長の真っ盛り，昭和元禄時代の幕開けの昭和42年５月に発刊された。本格的な月刊誌となった第９巻から第48巻までは，薄緑色の馴染み深い表紙で親しまれてきたが，第９～25巻は植物組織の顕微鏡切片，第26～28巻は藻類，そして，第29巻以降，雑草種子の写真が表紙を飾った。

創刊号の河田 党初代会長の発刊の狙いとして，「当協会の事業の内容や植物調節剤に対する多くの人の理解と関心を高め，識者の幅広い意見を掲載すること」と述べられている。

本誌は，植物調節剤開発利用に関連するトピック的な研究論文，これまでの知見を体系的に整理した解説，今後の技術開発の展望，薬剤の特性や適切な使用方法などを掲載し，この分野をリードする科学技術情報誌としての役割を果たしてきた。これを支えてきたのは，国，独法，大学，企業などの編集委員の諸氏である。地道ではあるが，編集会議で提起・議論の上，推薦された多様で有益な記事を，これまでに約1,700点超を掲載してきた。本誌2,300部は，関係機関に広く頒布され，除草剤･植調剤関係者以外にも，それなりに知られた存在となっている。

植調協会創立50周年記念式典・祝賀会が，昨年の12月12日，約500名の参加を得て開催された。その席上で，「緑の表紙で長年ご愛顧いただいている植調誌を来年４月の第49巻から，Ａ４判カラー化へとリニューアルします。どのようになるか，お楽しみに！」と紹介した。それが，このように見違えるようなスマートなスタイルに改装された。とは言え，外面を飾れば立派に見える「馬子にも衣装」の喩えにならないよう，このリニューアルを機に，研究開発や普及に役立つ技術情報，また科学的関心をそそる記事など，幅広い読者の要求に応える内容にしたい。

その一歩として，これまでの巻頭言やトピック的な論文･技術解説に加えて，①テーマ別の特集，②口絵等のカラー写真の充実，③リラックスして読めるエッセイの連載，④当協会の事業の効果的な発信，などを企画した。

これまでは，編集は当協会，発行は全国農村教育協会の植調編集印刷事務所という体制から，本巻からは当協会の主体的な発刊になる。これまで，発行人として，第４～41巻は故廣田伸七氏，第42～48巻は元村廣司氏のお世話になっている。そのご苦労とご功績に深く感謝申し上げる。

創刊号を振り返ると，農林省農事試験場の荒井正雄氏の「除草剤の今後の方向」が10回にわたって連載されている。それによると，「除草剤利用技術の目覚ましい進歩は，雑草害の防止のみでなく，機械化など省力的な新栽培法の発展を可能にし，農民を過酷な手取り除草作業から解放し，それによって健康面や，省力化で浮いた労力を収益性の高い作目や他産業へ振り向け営農面での改善に寄与した」。今後「機械化・省力化栽培に調和した雑草防除体系を確立することが，わが国の農業の飛躍的な発展の技術的な鍵となる。そのために，農業の発展の動向とその速度を正確に把握し，それに対応した作用特性を持つ新しい除草剤の創製と利用の研究を進めねばならない」という。除草剤の開発の原点は，栽培技術の革新を支えることにある。現在にも通じ課題でもある。

さらに「除草剤利用の基礎的研究とは何か」と問いに，「どのようにしたら除草剤を合理的に利用できるかを解明すること」と答える。「どのような条件の場合に，除草効果が大きいか，薬害が小さいか，あるいはその逆を解明すること，すなわち，変動要因の解明こそが基礎的研究である」と結ぶ。

そして，「その変動要因には，除草剤の性質，雑草群落の特性，環境条件との三者が関与する。これらの解明によって，適用地帯・適用条件・使用上の注意事項などが適正化される」と指摘する。本年度から当協会を中心に策定する「技術指標」を実効あるものにするためのツボが提起されている。